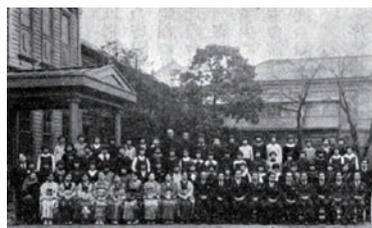


上野の杜の 波瀾万丈

第八回 上野児童音楽学園

昭和初期から戦時中にかけておこなわれた東京音楽学校の早期教育機関、上野児童音楽学園。短くも先駆的だった「学園」の知られざる歴史。

橋本久美子



1



2

上：第1回卒業式 昭和11年3月18日 74名が3年間の課程を終えた
下：伊澤修二初代校長の胸像前で

本学の音楽学部附属音楽高等学校は昭和二十九（一九五四）年四月に設置され、音楽の早期教育機関の一つとして今日に至っている。しかし、すでに昭和戦前期の東京音楽学校に上野児童音楽学園という機関があり、十一年半にわたり、全国に先駆けて早期教育が実践されていたことはあまり知られていないのではないだろうか。

学園設立の機縁は、昭和六（一九三二）年秋の乗杉嘉壽校長のヨーロッパ視察である。彼は欧米各国の音楽学校のレッスンや学生オーケストラはもとより、子供たちの演奏にも驚嘆した。たとえばパリ・コンセルヴァトワールのレッスンでは「十五六歳の少女がベートーヴェンのコンツェルトを暗譜で堂々と弾いてゐる有様は誠に驚くべきもので、譜を見なければ一寸先も歩けぬといふのとは大分距離がある」（『同声会

報』第一八二号 昭和七年四月）、またベルリンの少年合唱でも「その可憐さと、清澄な声とは如何に余に深い感動を与へた事であろう」（同）。

帰国後の校長はさっそく早期教育に着手し、昭和八（一九三三）年六月に上野児童音楽学園を開園した。ちようど東京音楽学校卒業生でパリから帰国した園田清秀が長男・高弘に絶対音感教育を始めた頃であった。当時の『同声会報』に学園案内が掲載されている。

「名称」上野児童音楽学園。目的「児童に音楽教育を施す。設立者」東京音楽学校同声会*。修業年限「三カ年。職員」園長—東京音楽学校校長、教員—東京音楽学校教員。入園資格「現に小学校に通学する第四学年以上**の男女児にして音楽の趣味を有するもの。」（*同声会は同校同窓会の名称。**後に三年生でも入園可能となった）。

入園テストは唱歌を歌い、弾ける曲を弾く程度でよかった。しかし学園の情報を得ることのできた家庭自体が限られており、実際には東京音楽学校卒業生の子女もしくは何らかの伝手のあるケースが多かった。水曜と土曜の放課後に週二回、遠くは鎌倉から、教育熱心な家庭の子供たちが音楽学校に集まった。

主科目の唱歌は「基本練習、単音唱歌、輪唱歌、重音唱歌、音声陶冶、鑑賞指導、即興創作」である。ピアノ、ヴァイオリン、チェロ等の兼修者が同じ課題曲で互いのレッスンを聴き合う切磋琢磨も、巷の個人レッスンでは得がたい環境であった。当時の児童たちの記憶には、コールユーブンゲンや楽典、校庭の芝生で講師や友人と遊んだ休み時間、通学路の風景が、今も

焼きついている。

昭和十一（一九三六）年には設立者を財団法人音楽会館（理事長「乗杉」とし、高等科四年、さらに十五年には研究科一年が新設された）。

園長の乗杉について、音楽界では文部省の役人として知られる程度であるが、彼は近代日本の社会教育論の主唱者とされる人物で、図書館司書や博物館学芸員



3

第83回定期演奏会のバッハ作曲《馬太受難楽》日本初演 昭和12年6月19日、日比谷公会堂 クラウス・プリングスハイム指揮、管絃楽約90名、音楽学校生徒200名と児童200名による合唱



の基礎を整え、文部省初代社会教育課長を務め、「油のりすぎ」の異名をとった。東京音楽学校の乗杉校長時代は、戦後日本の自信喪失と価値観の揺らぎのなかで封印されてきたが、国と学校の将来を見据えた斬新な運営は、今なお学び得る点が多い。

さて初年度は募集四十名に対して四倍強の応募があり、「非音楽的でないものは出来るだけ之を許可」し、百十八名を入園させた。梅、桃、桜の三クラスを声楽教師の他、本科と師範科最高学年の生徒数名が教生として担当した。学園は東京音楽学校の教育実習機関でもあった。講師は五十音順に、浅野千鶴子、石澤秀子、伊藤武雄、今井治郎、太田綾、小田雪江、片山頼太郎、川上きよ、川口軽六、城多又兵衛、木下保、呉泰次郎、澤崎定之、柴田陸、藺田誠一、谷康子、戸狩伸一、永井進、永田晴、貫名美名彦、野呂愛子、橋本秀次、平原壽恵子、福井輝子、宮内鎮代子、三宅洋一郎等多数、昭和十一年にはヴァイオリンのウィリー・フライも加わった。学園に関する記録は断片的で、今回も関係者にご協力頂いたが、今なお資料収集中である。

学園は男児合唱団も結成した。まず尋常小学校三年生百名を集め、次に五十名増員し、さらに音楽学校近隣の小学校に呼びかけた。目指すは東京音楽学校男生徒との大合唱で、城多、澤崎、藺田等、当時の声楽・合唱指揮の第一人者が指導に当たった。しかし器楽を嗜まない男児集団には苦戦し、二年後には解体して希望者を学園に編入させたが、その人数はわずか二十七名であった。

学費は月二円、楽器兼修者は五円であった。昭和八年の東京音楽学校の授業料は予科、本科とも年八十円、専門実技のみ教える選科は一科目につき年五十円とあり、学園の学費は、概ね良心的と受けとめられた。男児合唱団は無料であった。東京ではコーヒー、うどん、そばが十銭、新宿中村屋のカリが八十銭の時代であ

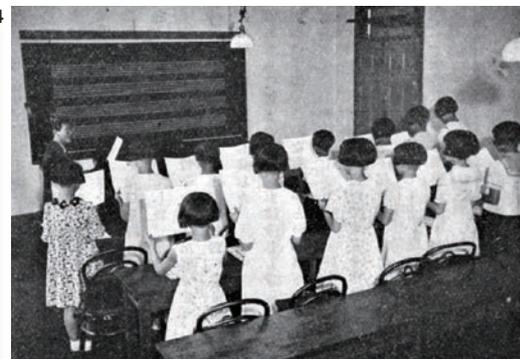
る（森永卓郎著『物価の文化史事典』二〇〇八）。

上野児童音楽学園の合唱は、皇后陛下行啓演奏会の《皇太子殿下御誕生奉祝歌》、ベルリン・オリンピック対独放送《征けよ伯林》、北原白秋作詞・信時潔作曲《海道東征》の他、東京音楽学校定期演奏会にも出演した。昭和十（一九三五）年のマラー《第三交響曲》初演では、プリングスハイムのドイツ語の猛特訓で暗譜し、「子供の合唱がいちばんうまかった」（太田黒元雄）等、批評家の賛辞を独占した。十一年のベリリオーズ《ファウストの劫罰》、十二年のバッハ《マタイ受難曲》でも好評を得た。児童合唱の声をSPレコードに録音した《海道東征》と《国民学校の歌》は近年CDに復刻されている。

昭和十一年の高等科には砂原美智子、中田喜直（父・章は《早春賦》の作曲者）、林路子等の名前が見える。我が国を代表するピアニストの一人となる園田高弘も父の早世後入園し、学園の申し子のような存在となった。昭和十四年、園田はバッハ《イタリア協奏曲》、中田はベートーヴェン《ソナタ変ホ長調》を弾いた。学園の出身者は前出の他、青山三郎、笠間春子、高良芳枝、田辺緑、土淵るり子、名越史子、萩原和子等、戦後の音楽界を支える人材を多数輩出した。

昭和十五（一九四〇）年には箏曲科を設けて邦楽の早期教育にも乗り出した。同年の児童数は四百九十四名（内男児四十四名）、講師は九十四名に達した。しかし昭和十六年頃から学校内に防空壕が掘られ、上野公園の噴水付近は高射砲の陣地となり、児童や講師も疎開を始め、十九年秋にやむなく閉鎖された。戦後に復活しなかったことを惜しむ声は多い。とはいえ昭和八年当時でも、官立学校が同窓会を設立者として学園経営を行ったこと自体、異例の乗杉流だったのだから。

（はしもと・くみこ／音楽学部講師）



クラス授業



乗杉園長を囲む児童たち

写真はすべて『同声会報』より。1=昭和11年3月、2=同12年9月、3=同12年6月、4=同12年6月、5=同12年2月

次号予告

教官総辞職 昭和十九年

第二次大戦末期の昭和十九年春、文部省は東京美術学校教官全員に白紙辞表を提出させ、教官を入れ替えて新たな指導体制を作った。その体制のまま大卒昇格を迎えた。改革の意味、結果と戦中の校内の状況を記す。